

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「薬剤師としての自覚と積極性」

研修期間：平成 26 年 2 月 23 日～3 月 9 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

090973272

吉島 夕貴

私が海外臨床薬学研修に興味を持ったのは、大学の講義や臨床研修の報告会で、アメリカと日本では医療や薬剤師の職域の広さに大きな差があることや、アメリカの薬学生はモチベーションが高いということを知り、アメリカの医療に興味を持ったことがきっかけである。5年生になり薬局や病院での実務実習を経験し、日本の医療を学んだ今、先進的なアメリカの医療についても自分の目で直接見て、経験して、日本との違いを考察し、自身の将来に繋げていきたいと思い参加を決意した。

平成26年2月23日から3月9日に行われた2週間の研修では、アリゾナ州のアリゾナ大学や医療施設を見学し、アメリカの薬学教育制度や医療制度について学び、またアリゾナ大学の薬学生と交流することができた。私たちが見学した医療施設はCVS pharmacy（アメリカ最大の薬局チェーンの1つ）とThe University of Arizona Medical Center（アリゾナ大学病院）の2施設であった。今回は研修のなかで特に印象的だったことを報告する。

まず、アメリカの薬学教育制度についてである。アリゾナ大学において臨床実習は1年生から始まる。1年目は週2時間SOAR（Student and Older Adult Relationship Project）があり、長期療養所にて高齢者の方と関わることで患者とのコミュニケーションに必要なスキルを身につけることができる。2、3年目はIPPE（Introductory Pharmacy Practice Experiences）という導入実習があり調剤薬局や病院にて、調剤や投薬を経験し、医薬品情報の活用を学ぶことができる。そして、4年目にはAPPE（Advanced Pharmacy Practice Experience）というアドバンスド臨床実習で調剤薬局や病院だけでなく、成人救急や外来臨床実習、自分の興味がある専門分野、薬局運営や管理などを学ぶことができる。このようにアリゾナ大学では臨床に重きを置いた教育制度が整っており、学生のうちから現場で求められる薬学的な知識やスキル、コミュニケーション力が高められると感じた。臨床重視の教育システムが行える背景には、アメリカのプレファーマシー制度の存在があると考えられる。薬学部へ入学する以前に、他大学にて基礎科目を学習しているアメリカの薬学生は、薬学部へ入学後「薬」「薬剤師」に重点を置いて学ぶことができる。制度の違いがあるといえども、日本の薬学生と比べアメリカの薬学生は、プレファーマシーを卒業した後の薬学部入学となるため、薬剤師になりたいという思いや、薬剤師としての自覚と意識が高く、積極的に学び患者さんと関わっていく姿勢の強さを感じた。

次に、アメリカの薬剤師の職能である。臨床研修に参加するまでの私は、アメリカの薬剤師は予防接種ができ、薬の処方権があったり、チーム医療にも主体的に関わっていたりと「日本に比べてアメリカは進んでいる」とばかり考えていた。しかしながら、臨床研修を通じて、薬剤師への信頼の背景には薬剤師の職能を高めるため、積極的に薬に関与し努力によって活躍の場を広げたことや、他職種や患者から信頼を得ているからこそ、薬剤師が認められているのだと感じた。患者の負担軽減につながる薬剤師による予防接種、医師と薬剤師の契約によって可能となる薬剤の処方（CDTM）。薬剤師になったからできるのではなく、薬剤師が医師や看護師、患者などから信頼されているからこそ、薬剤師としての職が確立しており、薬剤師が活躍できる場所がたくさんあるのだと感じた。

一方で、日本の医療の優れた点も知ることができた。それは地域との連携、他施設間との協力である。近年、日本において「薬業連携」の重要性が強調され、喘息や癌などいくつかの領域でその連携が具体的に実践されるようになってきた。アメリカでは、退院後や外来の患者さんは病院よりも地域の薬局でケアしていくという志向が強いように感じた。これはアメリカで病院や薬局それぞれの薬剤師が責任を持って自分の仕事を遂行し信頼しているからこそ、他の領域には足をあまり踏み入れないとも考えられるが、日本の「薬業連携」における患者情報の共有や、患者指導の統一化、病院や薬局合同の勉強会開

催、お薬手帳の有効活用などは患者の治療の質の向上につながるだけでなく、地域医療の中での薬剤師の地位、医療提供施設としての信頼度も今以上に向上していくのではないかと感じ、日本の良さであると思った。今回学んだアメリカの良い所を取り入れ、日本の良さと合わせ、日本独自の薬剤師を作り上げていくと良いのではないか思った。

アリゾナ大学での研修では、アメリカの薬学制度や医療を学ぶことができただけでなく、そこから日本の良さや足りないものを学ぶ事ができた。薬剤師は自分たちに出来ることを積極的に医療従事者に示していき、医療における薬剤師の必要性をより示していく事が大切であることを実感すると同時に患者の薬物治療に対して責任を持ち、医療スタッフや患者から信頼されることが必要だということも気付くことができた。アリゾナ大学の薬学生の薬剤師になる、そして薬剤師として患者さんのために働くという強い気持ちを持ち、積極的に授業や実習に臨む姿勢を見て、私に足りていなかった自覚と向上心の大切さに気付くことができた。また、アリゾナ大学の薬学生と交流する機会も多く、同じ薬剤師を目指す友人がアメリカにできたことや、そのモチベーションの高さにとても刺激を受けた。この経験から、薬剤師という自覚を持ち、患者さんや医療チームの中で自分に何が出来るかを常に意識できる薬剤師となり、主体的に薬物治療に参画することで職能を発揮していけるように努力したいと考えるようになった。また、私はこの経験を友人や後輩にアウトプットし、薬剤師としての自覚を持ち、学生のうちから積極的に取り組むことの大切さを伝えていきたいと思う。

今回このような貴重な機会を与えて下さったアリゾナ大学の先生方、引率の野田先生、そして共に研修期間を過ごした研修メンバーに感謝したい。